

報



會

會 岳 山 本 日

38

月 九 年 九 和 昭

ロンドン便り

石川欣一

十二月に當地に來てから、アルバイン・クラブに三度、レーデイス・アルバイン・クラブに二度、講演を開きに行きました。いろ／＼と知名の士も來てゐましたが、例によつて別に握手を求めにも行かず、ウエストン氏だけは向ふからやつて來て話しかけました。

アルバイン・クラブは浦山しいと思ひます。立派な講堂までついてゐるのだから。但しこの講堂の入口に、恐しく舊式な時計がかゝつてゐて、たいいてい時には時間があつてゐません。

◆ 今年のロイヤル・アカデミーにはアルバイン・クラブの建物のスケッチが出てゐます。小さな、きれいな繪です。

◆ 二、三週間前の日曜日に、Ball and Rock Club の遠足によばれて行きました。何度かよばれたのですが、いつも都合が悪くて行けませんでした。ウオーター・パークを七時の汽車で立つて、一時間半ばかりの處まで行き、サレーの美しい田舎を十二哩ばかり歩きました。いゝ天氣でおまけに涼しい風が吹いてゐたのでとてもいゝ氣持でした。一行は約廿

人。草つ原で辨當をくひ、居酒屋でビールをのみ、このリーダーであるアンダーソン氏の兄さんの家でお茶を御馳走になつて散會でした。

◆ めい／＼、勝手な風をして來ました。女の人ゝもゐましたが、これはスカーツ、男も近頃流行のヒザの上までの半ズボンは一人もゐませんでした。が、ニツカースや長いフロンネルのズボンや、中には固いカラをして來た人もゐます。僕はサンドウィッチと寫眞機とを片桐で買ったキスリング型とかいふ小さなルツクザツクに入れて行きましたが、みんなこれを珍しがつてゐました。

◆ 僕はハム・サンドウィッチを持つて行つたけど、鹽からくて、パンが乾いて、閉口しました。ほかの人のお辨當は、ヂヤムをつけたパンや赤大根や林檎やオレンジ等が多かつた様子です。一人、とても大きなルツクザツクを背負つて來た人があつて實にいろ／＼なものを出してはくつてゐました。この先生はこれが普段の「手」であるらしく、みんなで何とかかんとか、からかつてゐました。

◆ フェル・エンド・ロツクが遠足のプランの中に居酒屋を必ず含ませる

やうになしたのは割合に新しいことらしい。以前は恐しく厳格で、遠足中にビールなんて飲む法はないと頑張るメンバーが多かつたさうです。

◆ 「近く徹夜遠足をやるから出て來い」とアンダーソンがいつてゐました。何でも九時頃にロンドンを出て夜路を歩き、日の出を見て散會するんださうです。「景色も見えないのに、何だつて夜中、歩いたりするの」と聞きましたら、「それは誰にも分つてゐないが、とにかく餘程前からやつてゐることなので、別に理由はなく、暗い處をノ／＼歩く迄の話だ」といつてゐました。

◆ もう、そろ／＼大學は休みです。リチャーズの夫婦は、この間ケンズリツチから出て來た時、この夏はスイスへ行くといつてゐました。

◆ ロンドンにはウエストン氏、住友銀行の野田哲造氏——それから、とても古い山岳會の會員で、その後會員でなくなつた名古屋の八木道三さんなどがゐます。八木さんには時々あひますが、今は郵便切手の蒐集で山どころではないらしい。

主要目次

● ロンドン便り……石川 欣一
● 研究 欄

山の風致と登山者の風紀……宮崎 武夫

飲料用食鹽水に就て……谷 博

● 山の消息

仙の倉澤の山小屋に就て……吉岡春之助

有志晩餐會變更

十月四日開催の筈でありました、本會々員有志晩餐會は會務の都合で次の本曜、十月十一日に延期します。會場は追つて通知致します。御參會下さるやう。有志晩餐會世話人

スゴウ乗越及太郎平の小屋の位置に就て……笠原鐵太郎

● 會員通信

その日の鷲ヶ峰……月原 俊二
立山より……山田 多市

● 新刊批評、紹介

嶺、赤外線寫眞、年報、陸地測量部新刊地圖……五一六

● 會務報告……六



研究 欄

山の風致と登山者の風紀

宮崎 武夫

これは何も別段山に限ったことではないが、人が多く出入りするとそこには必然的に色々の問題が起つてくるものだ。

いろ／＼の目的をもつた、いろいろの宣傳が効いて、近ごろの登山熱

の勃興、登山者数の激増には驚かされる。それで御多分に洩れず山にも昨今は山小屋の物價、設備、衛生などの問題、それに登山者の側では山の公德心といったやうな諸々のあまり心地よからぬ憂世の風が吹きつ

のりつゝある。

山が如何に人里を遠く隔てゝゐても結局はうき世の延長、否うき世のもの——この頃の情勢では——である以上、これも所詮致し方のないことであらう。一方ではどし／＼宣

一口に風致問題といつても、いろ／＼のものがあつて、××崩れ、蛇抜といったやうな自然的なものは別として、水電工事の類、森林の伐採、登山者の破壊的な行爲などがその重要なものであらう。

水電工事は附近の風景を破壊すること殊に甚しいので、起工の度毎に屹度何かでゝる。しかしこれは關係諸官廳の認可を得てやることだし、森林の伐採にしても、おかみや所有者の御都合とあらば——だからと言つていたい放題にすてゝおくがよいと言ふわけではないが、これまた仕方のない次第である。これらは富源の開発事業や生業であり、且つ概してその範圍も局所的なものである。ところが登山者の非行となると全く仕末におへない。山の蒙る災害は谷間といはず、尾根といはず頗る深刻且つ廣範で、宛然群蜂のすぎ去つた跡にも等しいものがあるのを想ふと慄然たらざるを得ない。

三

登山者の激増に伴ふつゝの低下はどうも否まれぬ事實である。人の出入りがはげしくなつて兎角物議が起り勝ちなのにそのつづが低下したのだからたまらない。それにこのごろは遊山者が大分ふえてきた。登山もこゝまで普及したのかと思ふと慶賀にたえないのであるが、公衆道徳の觀念に乏しい國民性がこゝにも相當強く反映してその破壊的な行爲は特に甚しいものである。上高地など

この數年來のすきみ方は實にひどい。これは山岳愛護觀念の普及徹底によつてある程度までは防止出来ることではあらうが、「山を愛しませう」といつた標語をかゝげてゐる位では百年河清を待つにも等しい。國民の氣風なんでものは一朝一夕にその簡單にため直しうるものではないこの調子だと折角その筋の指導宣傳よろしきを得て、國民道徳の一般的レベルが高まつてもその時分には、も早や保護さるべき何物もなくやつてゐるであらう。それでこんな特殊な國民性に鑑み、今のうちに適當な對策を施しておかねばなるまい。

四

問題になるのはその「對策」なのである。色々の方策もあり、なすべき施設も幾多考へられるのであるがもと／＼都會生活で蝕まれた心の洗濯に年に一度か、二年に一度山へやつてくる遊山者大衆に向つて「山を愛しませう」山での道徳はどうのとわめても初まらないし、そんなことは國民性がうんと改善されぬ限り色々なむりが伴ひ却つて長つゞきがないものだ。それで一層のことグツとくだけて、一つ山岳遊廊(?)といつた風のを思ひ切つて創設してみても怎だらう。山地のことだから遊廊といつても都會の二業地のやうに藝妓を居せしめるといふわけではないが、一定區域に限つてその地域内においてはいろんな施設を自由になさしめる。そして入山者

にはその欲する所に從つて心ゆくまで山を満喫せしめるのである。つまりもろ／＼の「惡の華」をこの地域内に封じこめてしまふことによつて他區域の荒廢を出来るだけ防止しやうといふのがその本旨なのである。これは山での出来事ではないが、この春大阪のさる株式会社で運動會を催した處、その中食場の跡に遺棄されてあつた壽司だけでも何十人前とかの分量に及んだといふ事であるがこゝういつた手がすでに山へもぼつ／＼顔出ししてゐるがこれらをシャット・アウトして仕舞ふ事が出来ないし、また出来るわけのものでもない以上尋常一様の手段では風致の保存なんては出来ない相談である。そこで大の蟲を生かささんがための止むを得ざる非常手段として、毒を以て毒を制するといふ戦法も時と場合によつては考へねばなるまい。

五

上高地を昨年の秋に通つてきた人の話に、自動車道路やホテルなどが出来てからの上高地といふものはフェルト草履や二重まわしが横行してゐて、どうにも氣持が悪くて仕方がなかつたと言つてゐた。ウェストン翁は神河内の昔と變る、今の姿をきかれて潜然と涙禁ずる能はざりし由であるが(山、第六號)昔の神河内から現今の上高地に推移したのも究竟するに時世時節とでもいふか致し方のない事であらう。問題は曾ての頃を追想してたゞ潜然と涙を流し

たり、氣持が悪いといつてパイとソツポを向いてしまふことなのだ。これは確かに卑怯だ、俗化地域を出来るだけ小範圍に喰ひとめて、他に波及するを極力防ぐとともに、第二、第三の上高地が造り出されないやうに努めなくてはならぬ。

近ごろの若きアルピニストの間には目下ダンスが非常に流行してゐるこの調子だと山小屋のとなりだにダンスホールが建たぬとも限らない。これは譬だが、試みに上高地を解放し思ひ切つてうんと歡樂設備をしてみたまへ、遊山者大衆や、ややこしい登山者は甘き集る蟻の如く、上高地へくも蟻集し、おかげで他の山がどれだけサバくするかも知れない

六

風致問題についてはいろいろの對策をたてゝその善後策を講ずるとともに、山に入るものゝ素質の向上をはかり、兩者相俟つて互に協力し合つて行かねばならぬ。

岩登り術、スキー技術それに積雪期の登山と、最近我が國山岳界における登山技術の進歩普及は目ざましいが、登山者のがらの低下もかなり目につく。これは必ずしも登山者の數の激増ばかりに因るものでもないやうだ。近ごろ智育にかたより、德育がなほざりにされてゐるとはよく耳にすることであるが、こんな事が現在の登山界にも當てはまるのではないだらうか。ピッケルやスキー靴の盜難沙汰を耳にするにつけてもこ

の感をふかくする。

山の風致問題は水電工事、森林伐採といった方面とともに、入山者の矯風、即ち自己周囲の清掃作業に手を染めて行くことも肝要であらう。

(一九三四、六、七)

飲料用食鹽水に就て

谷 博

會報第三十六號に戸塚氏より飲料用食鹽水の提案がありましたが、實は私達も三年前から用ひて、その効用が眞水や糖分を含んだ水よりも妙とも渴感を醫すのに少量で足りる事丈でも優れて居ますので長い尾根縦走や又味噌汁にありつけない二三日の山歩きに使用して居ます。

一％といへば生理的食鹽水の含鹽價に近い値ですが、實地に當つて一々秤する譯にも行きませんので何時も小型水筒に小指の爪先大(甚だ概念的ですが)程、即ち口に啣んで本當に喉かにふつくりと鹹味を感じる程度に用ひて居ます。——これが果して一％の價を持つて居るか如何は測つて居ませんが——。大抵一日にこの小型水筒一つで済ませます。一回二—三口。又含鹽量の度が過ぎたり飲み過ぎたりすると大變食慾が減退します。

偶意的に使つて居ましたので戸塚氏の提示された疑問については考へませんでしたが、前記の様に適

當の含鹽水は飢渴感は強まりませんでした(糖類を含んだ水は大抵その後で一層強く渴を感じる様です)又嘔吐氣を催すかも知れぬといふ事について、私は平素嘔吐氣のある際に直ちにコップ一杯に食鹽小匙三分一又は二分の一の冷い食鹽水をのんで嘔吐を防いで居る事を念の爲に申添へてをさます。

分量等も甚だ難解でお恥かしいですが戸塚氏の提議の参考になればと思ひまして。

尙、私達は胡瓜を二つに割つて斷面に鹽を塗つたのや、チーズ、バター等を文獻に教へられて用ひて居ますが結果は大變良い。特に胡瓜とチーズは岩登りの途中中等で素晴らしい効果を與へてくれました。

山 の 消 息

仙の倉澤の山小屋に就いて

吉岡春之助

桐生高工山岳部では地理的關係上四季を通じて、上越國境の山々へ出かける事が多いので兼ねてから、適當な地點に山小屋を持ち度く思つて居た。停車場から餘り遠くはウィク・エンドや連休の登山やスキーに不便であり、又附近に一日行程のアトラクティブな山々や、グレンデを欲しいといふ様な、色々の都合の良い

條件を念頭に置いて、方々を物色して居つたのであつた。遂に仙の倉澤と毛度澤の合流點字西山東山と云ふ地點に山小屋を建てる事に決定した。二居への林道より別れて毛度澤への道を下つた中段の處である。

毛度の上流一時間足らずの處に法政の小屋がある。シッケイ澤や乗越を登る人達には毛度の小屋の方が便利であるが、仙の倉澤の支流を志す場合には我々の小屋の方が都合が良いであらう。

仙の倉澤は夏山としては、今まで餘り登る人が無かつた。わづかに下りにイイ澤を取る人があつた位である。先月仙の倉澤の上流へ偵察に行つて見たが、東ゼン、西ゼン共に登山は不可能では無いらしい。我々は平ビヤウの澤を溯行して見たが割合に歩き良い譯であつた。政吉を連れて行つたが、夏山としては彼にも始めてだとの話であつた。登りつめると平ビヤウの小池の處へ出る。平ビヤウ仙の倉間の高原は幾度行つても楽しい高原だ。イイ澤を下ると丁度ラクな一日行程であつた。

我々は小屋の敷地附近にベースキャンプを張つて方々歩いて見る豫定であつたが、翌日から天氣がずつと悪くなり、三日待つたが良くなる氣配が見えないので下山した。

小屋は目下工事に着手して居るから、此八月中には出來上る筈である三間に四間半のものであるから法政の小屋よりは少し大きい。二階だけ

で二十幾人か泊れる。階下には入夫二、三人寝られる場所を作つてある積雪期を考慮して階上からも出入りが出来るやうに設計した。

管理方法、使用規定等は考案中であるから小屋の竣功と同時に本會報で報告するつもりである。小屋の名稱も未だ適當なものを考へつかないで居る。

スゴウ乗越及太郎平の小屋の位置に就て

笠原鐵太郎

小生は六日から、立山を振出しに薬師、黒部五郎、華蓮を経て笠に上り、中尾峠を超えて上高地に下り、十九日に歸へりました。初め約十日間の豫定でしたが、途中スゴウ乗越の小屋へ来たところで五日間降り込められたので、かくは日數がかまつたわけだ。

次に前記の件に付て、此の行で心付いたことを二御報告申し上げます何かの御參考になれば幸いです。

第一にスゴウ乗越の小屋ですが、本年度の山日記に依ると、同小屋の位置の高度は二、五八五・二米となつてゐますが、之はどうも誤りの様です。スゴウ乗越から薬師ヶ嶽に至る尾根續きの中、二、五八五米と云へば二、五八五・二米の三角點附近の外ありません。五色の小屋では、鳶山へ上れば小屋が見えると云ふ話だったので、二、五八五・二米の三角

點附近に雙眼鏡で獲したのでしたが無敵でした。肉眼でさへ見えると云ふのに、八倍の雙眼鏡で見えない筈はないかと怪しみながら、越中澤山を下り、スゴウの頭を過ぎ乗越に下りました。兎に角上つて行つたら判るだらう。此處からは三五〇米の上り、今一息と思ひながら上り初めると、暫らくして思ひがけなくもヒョット小屋へ出ました。これがスゴウ乗越の小屋なのでした。岡上にての位置を求めるならば、スゴウ乗越の西南、高度二、二四〇米の邊と推測されます。小屋から藥師へ向つて百米許進んだ處に、非常に感じのよい緩傾斜の草原地があり、二、五八五・二米の三角點までは四十七分を要しました。これで二、五八五米地點にあつて而もスゴウ乗越の小屋とはどうも變だと思つてゐた疑問も解消しました。

第二は太郎平の小屋で、山日記には、二、五四〇米となつてゐますが、これは陸測昭和五年發行の山嶽圖檢ヶ嶽及乗鞍嶽近傍圖所載の上ノ嶽小屋の位置らしく思はれますが、この小屋は數年前に太郎兵衛平に移されて、現在は同圖上藥師ヶ嶽から上ノ嶽に通ずる徑と、有峰に下る徑との分岐點の附近、即ち太郎兵衛平の二、三七二・九米の三角點の西南二、三八〇米等高線に包まれた地點に立つてゐます。小生が上つた時は生憎霧の爲に見えなかつたのですが、藥師の頂上からよく見えるさうです。現在

の小屋から元の小屋跡迄は上り三十分かかりました。(七月二十七日記)

會員通信

その日の驚ヶ峰

六月三日 天氣いやが上にも晴朗今、三組のパーティが主峰驚ヶ峰の意ひ、何かしら落付かない一種の歡喜とも、興奮とも、榮譽とも、又恐怖ともつかぬ感情がひたぶるに押上げてくるのを何とも仕様がなない。

午前四時未明と云ふに雨後の星空に今日一日の晴天を祈つて宮地驛を後にした。

小堀牧場では未だねむたげな牛馬が不意の闖入者に妙なまなざしを送つてゐる。何度通つても美しい草原だ坊中驛を發つた團體の登山バスが杵島岳の横腹を東に西に縫つて登つて行く。暗夜の中に流星の如く、時には狼火の如く、サーチライトが右往左往阿蘇に見る一異觀であらう。遠くサイレンは國立阿蘇公園の序曲でもあるよう。

仙醉尾根の工事小屋では五高のパーティがセクリタス愛撫し乍ら、今日の赤ガレ谷を狙つてゐた。無帽又は冠冠りの素朴さは、我等の岩場としての氣易さを示してゐるようだ自分達五人、四〇米ザイル一本に心配げに首をかしげてゐた。無理もない事だ。

虎ヶ峰より二年振りの主峰驚ヶ峰を仰ぐ、古き懐しきは去り又新らしき感情のときめくを知る。あの秋、岩肌の赤やけた色はなく、唯、暗灰色に一層の無氣味さを語つてゐる點綴とミヤマクリシマカマイヅルソウかしら、岩頭、岩陰と縁の萌えたつやうな配色は、この荒くれ岩に一抹のうるほひでありオアシスともなう。

五高の連中は急テムボに虎下を過ぎ、關門を入りて第一瀧の難場で見物なザイル、テクニツクをやつてゐるようだ。約百米遅れて、虎下で別れた八幡山岳會のFが單獨で之を追つてゆくものゝやう。

赤ガレ湖行を眺めるにこれ程よい展望があるだらうか、暫しは無中でこの行進を見守つてゐた。

寫眞は同じく虎ヶ峰より主峰驚ヶ峰を見上げたものであつて、初夏の朝陽を片面に弱く受けて、左は松ヶ尾谷より右は赤ガレ谷よりモリ／＼と盛上つて、四圍を睥睨するものゝやう。

前方、ジャムダルのピーク邊りにまづわりつくマイヅル草の色が出したい位、岩とのコントラストは見事なものであつた。

赤ガレ谷の凄味は主峰より右に落ちてゐる西北稜に遮られ窺ふ可くもないが高岳への取付、天狗の舞臺の屏風岩が右肩はるか遠く望まれて懐しい。此の舞臺に辿りついて何人も今迄の何時間かの尊い緊張より始め

て開放され、今更らしく辿り來し北尾根のソレ／＼を見返えるのも此處からだから。

成功と、安堵と、空腹との錯綜した感情の亂舞するの此の舞臺である。

驚下オーバハンクで最後の汗物をやつてゐる時、五高の連中と行を共にしたFも先着してゐて、

「降りて行かうか」と、Fは言つて呉れた泪ぐましい程有難かつた。

「ナニ、大丈夫」と反撥的にビツチを上げる事が出来た。

アノサビルガヨナ(噴火灰)の爲め、黒々汚れてゆくのにハラ／＼させられる。

此の日、此の尾根、オンパレードだつたか。その頃、虎より口笛とハローモニカのリズムが私達を一樣に注目させた。

「何處から來たか——？」

「福岡——」

やうやく聞き取ることの出来た問答であつたが、

「どつちへ行くか——」には一行啞然顔りにこの事が心配になつたが彼等も勇ましく虎よりアンザインして南下するのを見て、自分達もラストコース、第二キレット、ナイフエツヂへと向つたが、歸路、仙醉尾根より目に這入つたのは彼等であつたが、驚ろいた事には主峰下のギヤツブに未だ立つてゐる事だつた。虎より四十分のコースだらうか。それを五時間餘を費してゐる事だつた。

彼等は初登攀である事は驚ろきの問答で判つてゐたが、餘りの事に一同は驚ろいた。後報に寄ればギヤツブより又三時間を費して主峰に立ちしも時既に七時過ぎ、賢察として主峰上風を避けてキヤムプせし由、恐らく北尾根史上キヤムプは嚆矢のものであらう。

翌の日、又晴天に恵まれ、一氣に残るコースを辿りしは天與とは云へ彼等の元氣には敬服の他はない。

しかし平和な日はばかりはない。四つのアクシデントは、我等に何事かを暗示し、眞摯のエクスパートのみに許さるゝものではなからうか。心なき散歩者がM谷の露と消えたのも最早三歳を數へよう。

今般多、熊本の某グルツベは清淨白に華粧せる氷と雪と岩とのかもし出す、至高至上の登高記録は得たが、今尙、全治不明の凍傷に苦しんでゐると聞く。

赤ガレ谷を埋む落石はかばかり多く共、タツタ一輪のイワカガミは、あのナイフエツヂの岩陰に又會ふその日迄、かぼそくも咲いてゐて呉れと祈る 初夏の日に——。

月原 俊二

(編者曰、虎ヶ峰より見たる驚ヶ峰の寫眞一葉附屬しあれども會報編輯の都合により省きたることを筆者に斷る)

立山より

八月に這入り漸く定まつた天候として山に登り得る機会とに恵まれて去る八月十二日から十七日迄の六日間を薬師、立山、鯉に遊ぶことが出来た。私達の属する通信山岳會の會員、富山郵便局のH君の同行を得て、第一日は上新川郡小口川を過つて、第二日は上新川郡小口川を過つて、第三日は上新川郡小口川を過つて、第四日は上新川郡小口川を過つて、第五日は上新川郡小口川を過つて、第六日は上新川郡小口川を過つて、第七日は上新川郡小口川を過つて、第八日は上新川郡小口川を過つて、第九日は上新川郡小口川を過つて、第十日は上新川郡小口川を過つて、第十一日は上新川郡小口川を過つて、第十二日は上新川郡小口川を過つて、第十三日は上新川郡小口川を過つて、第十四日は上新川郡小口川を過つて、第十五日は上新川郡小口川を過つて、第十六日は上新川郡小口川を過つて、第十七日は上新川郡小口川を過つて、第十八日は上新川郡小口川を過つて、第十九日は上新川郡小口川を過つて、第二十日は上新川郡小口川を過つて、第二十一日は上新川郡小口川を過つて、第二十二日は上新川郡小口川を過つて、第二十三日は上新川郡小口川を過つて、第二十四日は上新川郡小口川を過つて、第二十五日は上新川郡小口川を過つて、第二十六日は上新川郡小口川を過つて、第二十七日は上新川郡小口川を過つて、第二十八日は上新川郡小口川を過つて、第二十九日は上新川郡小口川を過つて、第三十日は上新川郡小口川を過つて、第三十一日は上新川郡小口川を過つて、第三十二日は上新川郡小口川を過つて、第三十三日は上新川郡小口川を過つて、第三十四日は上新川郡小口川を過つて、第三十五日は上新川郡小口川を過つて、第三十六日は上新川郡小口川を過つて、第三十七日は上新川郡小口川を過つて、第三十八日は上新川郡小口川を過つて、第三十九日は上新川郡小口川を過つて、第四十日は上新川郡小口川を過つて、第四十一日は上新川郡小口川を過つて、第四十二日は上新川郡小口川を過つて、第四十三日は上新川郡小口川を過つて、第四十四日は上新川郡小口川を過つて、第四十五日は上新川郡小口川を過つて、第四十六日は上新川郡小口川を過つて、第四十七日は上新川郡小口川を過つて、第四十八日は上新川郡小口川を過つて、第四十九日は上新川郡小口川を過つて、第五十日は上新川郡小口川を過つて、第五十一日は上新川郡小口川を過つて、第五十二日は上新川郡小口川を過つて、第五十三日は上新川郡小口川を過つて、第五十四日は上新川郡小口川を過つて、第五十五日は上新川郡小口川を過つて、第五十六日は上新川郡小口川を過つて、第五十七日は上新川郡小口川を過つて、第五十八日は上新川郡小口川を過つて、第五十九日は上新川郡小口川を過つて、第六十日は上新川郡小口川を過つて、第六十一日は上新川郡小口川を過つて、第六十二日は上新川郡小口川を過つて、第六十三日は上新川郡小口川を過つて、第六十四日は上新川郡小口川を過つて、第六十五日は上新川郡小口川を過つて、第六十六日は上新川郡小口川を過つて、第六十七日は上新川郡小口川を過つて、第六十八日は上新川郡小口川を過つて、第六十九日は上新川郡小口川を過つて、第七十日は上新川郡小口川を過つて、第七十一日は上新川郡小口川を過つて、第七十二日は上新川郡小口川を過つて、第七十三日は上新川郡小口川を過つて、第七十四日は上新川郡小口川を過つて、第七十五日は上新川郡小口川を過つて、第七十六日は上新川郡小口川を過つて、第七十七日は上新川郡小口川を過つて、第七十八日は上新川郡小口川を過つて、第七十九日は上新川郡小口川を過つて、第八十日は上新川郡小口川を過つて、第八十一日は上新川郡小口川を過つて、第八十二日は上新川郡小口川を過つて、第八十三日は上新川郡小口川を過つて、第八十四日は上新川郡小口川を過つて、第八十五日は上新川郡小口川を過つて、第八十六日は上新川郡小口川を過つて、第八十七日は上新川郡小口川を過つて、第八十八日は上新川郡小口川を過つて、第八十九日は上新川郡小口川を過つて、第九十日は上新川郡小口川を過つて、第九十一日は上新川郡小口川を過つて、第九十二日は上新川郡小口川を過つて、第九十三日は上新川郡小口川を過つて、第九十四日は上新川郡小口川を過つて、第九十五日は上新川郡小口川を過つて、第九十六日は上新川郡小口川を過つて、第九十七日は上新川郡小口川を過つて、第九十八日は上新川郡小口川を過つて、第九十九日は上新川郡小口川を過つて、第一百日は上新川郡小口川を過つて、第一百一日は上新川郡小口川を過つて、第一百二日は上新川郡小口川を過つて、第一百三日は上新川郡小口川を過つて、第一百四日は上新川郡小口川を過つて、第一百五日は上新川郡小口川を過つて、第一百六日は上新川郡小口川を過つて、第一百七日は上新川郡小口川を過つて、第一百八日は上新川郡小口川を過つて、第一百九日は上新川郡小口川を過つて、第二百日は上新川郡小口川を過つて、第二百零一日は上新川郡小口川を過つて、第二百零二日は上新川郡小口川を過つて、第二百零三日は上新川郡小口川を過つて、第二百零四日は上新川郡小口川を過つて、第二百零五日は上新川郡小口川を過つて、第二百零六日は上新川郡小口川を過つて、第二百零七日は上新川郡小口川を過つて、第二百零八日は上新川郡小口川を過つて、第二百零九日は上新川郡小口川を過つて、第二百一十日は上新川郡小口川を過つて、第二百一十一日は上新川郡小口川を過つて、第二百一十二日は上新川郡小口川を過つて、第二百一十三日は上新川郡小口川を過つて、第二百一十四日は上新川郡小口川を過つて、第二百一五日は上新川郡小口川を過つて、第二百一六日は上新川郡小口川を過つて、第二百一七日は上新川郡小口川を過つて、第二百一八日は上新川郡小口川を過つて、第二百一九日は上新川郡小口川を過つて、第二百二十日は上新川郡小口川を過つて、第二百二十一日は上新川郡小口川を過つて、第二百二十二日は上新川郡小口川を過つて、第二百二十三日は上新川郡小口川を過つて、第二百二十四日は上新川郡小口川を過つて、第二百二五日は上新川郡小口川を過つて、第二百二六日は上新川郡小口川を過つて、第二百二七日は上新川郡小口川を過つて、第二百二八日は上新川郡小口川を過つて、第二百二九日は上新川郡小口川を過つて、第二百三十日は上新川郡小口川を過つて、第二百三十日

く空恐ろしき極みであつた。北、中南アルプスを始め奥秩父の峯々等過去十数年間の足跡を瞬時にして然かも觸るゝばかりの近きに一巡し終つたことは全く隔世の感切なるものがあつた。

昭和九年八月十九日

山田多市



新刊批評紹介

嶺 第四年

菊版一〇〇頁

丸善山岳部年報である。その内容の最も特質とも云ふべきは、何時年

ら、お手のものゝ山岳文獻の涉獵に於て、他の所謂實業登山團體の一頭地をぬいてゐることは、自らも許し又讀者をして明に斯く感じせしめる處である。説苑に於ける植原氏が一文「浪漫精神と山岳」にはスチーブン、ゲーテ、ルソー、スピノザ等のロマンテイズム論を引用して説き來り、オーベルマン、ガアルプス山中に於ける感想文の引例、又ワアズウアス、ツルゲネース、コリーツジ

パイロンを掲げて、西歐のロマンチズムの山岳に展會された一面に及び次に北村、透谷、島崎藤村、高山樗牛、國木田獨步、宮崎湖處子等によりて起つた日本に於けるロマンチズムを引例述説し比較的近代に於ては志賀重昂、小島烏水氏等の効蹟を述べた。仲々學究的な論文である。又小林氏の「自然觀實に對する一つの態度」は、嶺第三年に於て氏が發表せる我國山岳登山の態度と相對照すれば之又氏が如何に山に對して眞摯な態度を持するかは讀者に強く殖へ付けるものがある。

長島氏はゲーテの登山的の一面を捕へて論じ、彼が瑞西に旅行せる際に其時代稀らしくメルム、ド、グラスを踏み、コルド、バルムに登り、又雪崩の危険を冒しつゝフカ峠を越してオーベルグドルドに到つた事につき、又伊太利旅行に於けるウネツア火山、ハルツの旅、プロツケン登山々岳讚美の一節より、山岳紀行文に對すゲーテの文が一つの指針ともなるべきことに文を結んでゐる。

次に白石氏は「マーチン、コンウエイ」と其著書に於て、コンウエイの人となり、登山者としての彼及び其著書十六種類につき簡單なる説明を與へて、讀者にコンウエイ研究心を喚ぶものがある。角倉氏の「特殊地帯降法私見」は積雪期山岳にスキーを用ふる場合の氏の體驗の發表であらう。又小林氏は「輪標小考」に於て八幡太郎義家が貞任追擊に之

を用ひたることを述べ、近代的のもの、會津のもの、信州のもの、越後ものにつき説明し、冬期登山と輪標の研究を稱へて居り、之を外國ものと比較考證をなしてゐる。紀行欄に於ての、東北朝日連峯は八月中の紀行文其他である。(額田)

赤外線寫眞

額田敏著 本文八二頁寫眞五二葉
梓書房發行 價壹圓

赤外線寫眞の始まりは本書に據れば(一頁)既に二十四五年前のこととであるが、吾國に於て之が山岳寫眞に利用され吾々の眼に觸れるやうになつたのはまだ四五年を出ない。赤外線により撮影された山岳寫眞を初めて見たときは、なんと不自然な面白味のないものだらうといふ印象しか浮ばなかつた。然しそれは、遠近感を無視する傾向が強い(五十六頁)のと、普通寫眞では先づ避けた順光線(三十六頁)を選ぶのと、この二つのことのために當然の結果なのだ。

こんな印象をもつた、赤外線による山岳寫眞も、深山みる内に追々不自然さや無趣味さを感じないやうになり、殊に赤外線による望遠寫眞などは普通寫眞では手も足も出ないやうなものが寫るらしいので、興味を惹かれたことが少くなかつた。

オーソクロマティック乃至パンクロマティック乾板は久しく使用してゐながら、未だ山岳寫眞の行詰り、

(四十五頁)に到達してゐない自分も、時々赤外線寫眞に食指を動かすに至つたが、普通乾板から整色乾板に移るときと違つてちよつと、越へ難い溝があるやうに思はれて仕様がなかつた。

いま本書を手にして、「理論的な所は省略し、實際的な所として、何人にも容易に試験出来る様な事例につき説明」(六十三頁)されたのを讀むに及んで、赤外線による山岳寫眞何程のことかあらん、ひとつ自分も企てるかなと考へた。卷末寫眞の大部分は見事な赤外線山岳寫眞の實例であるが、それ等を見るに及んで、益々試みたくなつて來た。

寫眞の専門家は何といふか知らないが、赤外線寫眞に氣を惹かれたがら手を出し兼ねてゐる素人寫眞師兼登山者である人達にとつて、本書は山の惡場で尻込みする登山者を元氣づけてくれるガイドのやうなものであると思ふので、山岳圖書ではないが茲に紹介する。(T・F)

年報 第二號

横濱山岳會年報 菊版二〇六頁
横濱在住の山岳愛好家によつて、つくられた處の「おつとめ」を持つ人達の山の會の年報で、昭和七年から九年に亘る會員の研究、登山記録等の發表である。文中、何れも一讀に値しないものはないが、就中、廣瀬潔氏の「氷雪期富士登山の文化史考察」はその最たるべきものであら

ふ。堂々三十五頁に亘り、長文なるが故に非ず、富士山の「山開き」季節以外の登山、主として厳冬期登山史を意圖して物したものの、山に關心を持つ日本人として、又、冬期の富士山に多少でも思をよせる一人として、非常に面白く讀めた。その文獻涉獵の努力は大したものであつた事を思ふものである。

次にこの横濱山岳會が地の利を得てゐる「丹澤山塊」と章目を別に置いて、一頂一澤を忽にせず、非常に微に入り細に亘りて研究されてゐる事は、この山塊に歩を運ぶ人々に大いに參考になる事と信ずる。ことに實際に踏査せられた處の附録地圖はそれのみでも、同地方への登山者を益することが大きいものであらふ。尾關廣氏の「雪期の富士」は氏が御殿場口より多年冬季富士への登山経験から物された文であり、これからそろ／＼富士山の冬季登山を志す人に對して參考になる文である。文中防寒具中「……冬の服装はダブルを目標とし……」云々はその意を解し兼ねる。

又富士山積雪期登山に際し、彼の烈しき風に對して單に「……フランネルの大型風呂敷様の布一枚で頭部をスキー帽の上から保護する……」のみで體部……少くとも烈風に對しての上體の保護裝置に就て、一も言及されてないのは、積雪期登山準備に對する一つの必要なる要素を觀過されてゐるものと云ふことが出来る

尾澤俊藏氏の「山想獨語」は、氏が山に對する考へを發表されたものらしい。御多分に洩れず「山岳文學」とやらに言及し、偉大なる構成を持つ山岳文學の出現を云々して居られる。而し直ぐその後で、山岳の時々刻々に移行行く色調につき、……山に登る人に對しては大なるフアクターではない……とされてゐる。人々によつて山への感覺は夫々異なるものであり、個人の感覺を人にまで強いる事は出来ないが、山の色、これは、我々が山に登る際に我々の五感に感ずる一つの大きな要素でないとは思はれない。その、山の視覚を無視することは、特に山岳文學を云々する者にとつては到底出来ない事と思ひのである（他の感覺が如何に鋭敏なる感受性を有するとも）山を認識するに網膜を通し、視神經を通じて見るばかりでなく……この助によればこそ、その他の感覺に迄深く大なる認識感を與ふるのである。人の五感、只一つ／＼單獨に作用する時は、群官が象に觸る例へもある様に到底不具感覺たるをまぬかれぬ。尤も最近觸感の鋭い盲人達が富士山に登り「山を紙める」と云ふことさえもあるから」

其他の記事は他の山岳會の年報、部報に大同小異し「記録」等に於て年中行事の山につき時間的記録等の發表である。（額田）

陸地測量部新刊地圖

二萬五千分ノ一地形圖 新版	小千谷近傍 五號 長岡
宇都宮近傍 一五號 宇都宮西部	同 一九號 板木
日光近傍 四 日光南部	泊 居 一號 小田 八號 突 山
五萬分ノ一地形圖 新版	五萬分ノ一地形圖修正
長野 一六號 諏訪	高梁 二號 津山西部

會務報告

臨時役員總會

昭和九年七月二日午後七時於事務所出席、高頭、小島、高野、中村、木暮、島山、横、茨木、額田、飯塚、逸見、神谷、田中、黒田、委任、近藤、松方、三田、冠、津田、三木、福島一、山小屋建設地視察報告、並に是に對する今後の方針決定。

山小屋委員を代表して横氏より視察の報告あり、右に關し審議の結果『現物視察委員の報告に基き役員總會は審議の結果、潤澤小屋建設豫定地は雪崩の危険性ありと認め建設せざるに決議す』との決議をなし、報告書を公開することとせり。（右報告書は、前號會報の附録として既に公表せり。）

七月定例理事會
出席、高頭、横、松方、茨木、福島、神谷、黒田、

一、山小屋現地調査報告書の件（横）
一、會計報告（神谷）
一、スキー日記の件（松方）

會員計報

東京市渡邊秀氏（昭和四年二月入會會員章番號一〇七）
昭和八年十月九日逝去せらる。
東京市 澤井徳太郎氏（昭和七年十二月入會、會員章番號一四〇三）
昭和九年八月十二日逝去せらる。
本會は右兩氏に對し茲に謹而哀悼の意を表す。

新着圖書

千島の山	七月號	長谷川清三郎氏
地學雜誌	八月號	東京地學協會
野鳥	同	同 朋 文 堂
山小屋	同	同
ケルン	同	同
登山とスキー	同	同
ツリースト	同	同
ジャパンツリーストビユーロー	同	同
寫眞月報	同	同
霧の旅	第四四號	霧の旅會
嶺	第四年	九善山岳部
山行	第二號	筑紫山岳會
あけび	第四號	あけび會
アルカウ趣味	八月號	同

Natural History Vol XXXIV
No.4 Jul.-Aug. 1934
The American Alpine Journal
1934
Sierra Club Bulletin Vol.XIX
No.3 Jun. 1934
The Mountaineer Vol. XXV, No
8, 9 Jul. Aug. 1934
La Montagne Np.260 Juin 1934
Revue Alpine No.33 Dec. 1933
Appalchia Vol.XX No.4 June
1934
Club Alpno Italiano No 6 Giugno
1934
Unione Ligure Escursionisti No.6
Giugno 1934
Planinski Vestnik Leto 1934
Revue Alpine No.236 : e Trim
The Geographical Journal Vol.
LXXXIV No.1 Jul. 1934
Mountaineering Journal Vol.2
No.3 Jun. Aug. 1934
Trail and Timberline No.189
Jul.1934
Butletti del Centre Excursionista
De Catalunya Any XLIV
Num.462 Juny de 1934
Svenska Turistforeningens Tidsn
ig No 6 Juli 1934
DIE ALPEN No.7 Jul. 1934
~~~~~

|                 |                       |     |
|-----------------|-----------------------|-----|
| 前田曙山著           | 高山植物叢書、第壹、貳卷          | 二冊  |
| 三好 學者           | 日本植物景觀第八集富士植物朝日スポーツ叢書 | 一冊  |
| スキー・スケート        | リユツクサツク特別號            | 一冊  |
| 龍川谷遭難の真相に就て     | 佐藤幸一編著                | 一冊  |
| かるゐさわ           | 大町桂月著                 | 一冊  |
| 東京中心一日遊覽        | 一戸直敏外著                | 一冊  |
| 日本アルプス縱斷記       | 小島、楨、講演               | 一冊  |
| 山岳趣味            | 江部藏圓譯編                | 一冊  |
| 印度聖跡誌           | 滿鐵商工課編                | 一冊  |
| 滿蒙の産業           | 大毎外國通信部編              | 一冊  |
| ノビレ少將北極探檢記      | 志水鳩峯著                 | 一冊  |
| 京都名勝圖繪          | アサヒグラフ臨時増刊國立公園號       | 一冊  |
| 木曾案内及各地案内パンフレット |                       | 一冊  |
| 北海道詳圖及分縣地圖其他    |                       | 八冊  |
| 以上 木村 鐵吉氏       |                       | 二四冊 |

届けることが出来ます。これから成るべくこの調子でやり度いと思つてゐます。會員諸賢に置かせられましても、夏山の收穫其他のをどしどしと御送り下さいまして、十月號は、山の紅葉の様に、はなやかに、面白く、味のあるものにし度いと思ふのであります。

會報は、會員諸君の手によりてこそ、花も咲き、實もなるものと思ひます。諸君如何です？

額田

昭和九年九月八日印刷  
昭和九年九月十日發行

發行者 額田敏  
編輯兼印刷人 逸見眞雄  
東京市芝區榮平町二  
(不二屋ビル)

發行所 日本山岳會  
電話・一六四九番  
廣店一手取扱 進恒社  
電話・谷・五六一零

(多木印刷所印刷)

| Vol. | No. | 定價    | 送料 | Vol. | No.      | 定價  | 送料 |
|------|-----|-------|----|------|----------|-----|----|
| 4    | 1   | ¥2.00 | 6  | 9    | 2        | ¥70 | 〃  |
| 〃    | 2   | 2.00  | 〃  | 〃    | 3        | 70  | 〃  |
| 〃    | 3   | 2.00  | 〃  | 14   | 2        | 50  | 8  |
| 5    | 2   | 1.00  | 8  | 〃    | 3        | 50  | 〃  |
| 〃    | 3   | 1.00  | 〃  | 15   | 2        | 50  | 6  |
| 6    | 1   | 1.00  | 〃  | 〃    | 3        | 50  | 〃  |
| 〃    | 2   | 70    | 〃  | 16   | 2        | 50  | 8  |
| 〃    | 3   | 70    | 〃  | 〃    | 3 (奥上州號) | 50  | 〃  |
| 7    | 1   | 1.00  | 〃  | 17   | 2        | 50  | 6  |
| 〃    | 2   | 1.00  | 〃  | 〃    | 3        | 50  | 〃  |
| 〃    | 3   | 1.00  | 〃  | 18   | 1        | 50  | 〃  |
| 8    | 1   | 70    | 〃  | 〃    | 2        | 50  | 〃  |
| 〃    | 2   | 70    | 〃  | 21   | 2 (黒部號)  | 50  | 8  |
| 〃    | 3   | 70    | 〃  | 23   | 3 (臺灣號)  | 50  | 〃  |
| 9    | 1   | 70    | 〃  |      |          |     |    |

東京、芝、琴平町一、不二屋ビル307號・振替口座東京四八二九番



## 山十月特輯號

## 高原

九月廿七日發賣

菊判二六頁

原色版等六枚

本號に限り

一圓二十錢

(送料四錢)

普通號三十錢

山の隨筆雜誌として独自の成育を續けてゐる「山」が思ひ切つて内容を描へた特輯號です。山と高原との關聯に就いては喋々を要しないとこそ編輯には出來る限りの努力を拂ひました。仲秋の候、山岳家諸氏の机上にあつて、山行のあひ間の安息所ともなれば幸に存じます。

高原の低語 (高原名稱史小考)

木暮理太郎  
辻村太郎

たてしなな歌  
尾崎喜八

ある挿話  
矢田津世子

高原の魅力  
沼井鐵太郎

わが回想  
小金井素子

高原に凝視するもの  
細野重雄

高原に馬を見た話  
中西悟堂

高原の健ひ  
島田重雄

馬鈴薯咲く頃  
高野鷹藏

高原の健治  
小笠原勇八

馬鈴薯咲く頃  
福島昌夫

高原の健治  
高橋健治

馬鈴薯咲く頃  
前田鐵之助

高原の健治  
秋風の吹く頃に

馬鈴薯咲く頃  
齊藤茂吉

高原の健治  
山・音・樂

馬鈴薯咲く頃  
柳田國男

高原の健治  
セ・ガン・テイニ

馬鈴薯咲く頃  
正木不如丘

高原の健治  
ベルゲンの温泉

馬鈴薯咲く頃  
小島清佐水

高原の健治  
エルザス山間の追憶

馬鈴薯咲く頃  
別所梅之助

高原の健治  
熱河の高原

馬鈴薯咲く頃  
林英美子

高原の健治  
日出生と其の附近

馬鈴薯咲く頃  
中島健藏

高原の健治  
霧ヶ峯

馬鈴薯咲く頃  
三好達治

## 鳥の渡り

## 野鳥十月特輯號

十月一日發賣

菊判二三二頁

原色版等八枚

本號に限り

一圓二十錢

(送料四錢)

普通號五十錢

鳥類標識法とは何か  
東京灣の渡り鳥  
渡り鳥の心理  
風變りな渡り鳥  
海の渡り鳥  
秋の渡り鳥

農學博士 内田清之助  
理學博士 黒田長禮  
公爵 川村多實二  
伯爵 鷹司信輔  
伯爵 山階芳麿  
伯爵 清棲幸保

鹿兒島縣のパメキに就いて  
關西に於ける渡り  
大阪市附近の渡り鳥  
東北地方に於ける秋の渡り鳥  
秋田地方入内省の渡り  
燈臺に寄つて來る渡り鳥  
青森縣燕鳥のウミネコ  
津輕海峡を通過する  
渡り鳥の移行運動  
鳥の渡りに就いて  
千鳥・鴨・鴨の話  
鶉・千鳥・鴨・鴨

岡島銀次  
川口孫治郎  
榎本佳樹  
葛精一  
仁部富之助  
松山資郎  
小松正躬  
和田千藏  
中村幸雄  
坊城俊良  
中西悟堂  
木曾谷に於ける霞網獵  
多摩丘陵に於ける霞網獵  
渡り鳥の觀察  
宮城縣下の渡り  
中野區に於ける渡り鳥日誌  
鳥類だより  
コカハラヒワの蕃殖の觀察  
鳥の詩歌  
與謝野晶子 窪田空穂  
齊藤茂吉 北原白秋

川童の渡り  
星座と鳥  
東京市の空を渡つてゐた雁  
カハセミの巢

柳田國男  
野尻抱影  
河合若夫  
佐藤春吉  
岡田葉吉

海約島より  
臺灣藩人の鳥占ひ  
小笠原島の鳥  
屈斜路コタンの野鳥群

藤田蕉翠  
鹿野忠雄  
山下史人  
更科源藏  
譯篇  
フアロドン小品から  
季節と渡り鳥  
十月の鳥  
戸川秋骨  
尾崎喜八  
中西悟堂

房書梓

電話東京東區神田區  
電話東京東區神田區  
電話東京東區神田區東京市神田區  
東京市神田區  
東京市神田區